

宮城谷昌光

Miyagitaru
Masamitsu
Moshokum

子血賞君

もういっしょく

1

講
談
社

宮城谷昌光

*Miyagiku
Masamitsu
Moshokun*

丁
皿
嘗
君

もうしやうくん

1

もうしようくん
孟嘗君 1 (全5巻)

1995年9月25日 第1刷発行

著者 宮城谷昌光
みやぎ たにまさみつ

発行者 野間佐和子

発行所 株式会社講談社

東京都文京区音羽二―二二二／郵便番号一二二〇一
電話 文芸図書第一出版部(〇三) 五三九五―三三〇四

書籍第一販売部(〇三) 五三九五―三六二二

書籍製作部(〇三) 五三九五―三六一五

印刷所 豊国印刷株式会社

製本所 黒柳製本株式会社

定価はカバーに表示してあります。

宮城谷昌光 (みやぎ たに・まさみつ)
1945年、愛知県蒲郡市に生まれる。
早稲田大学英文科卒。1990年、『天空
の舟』(海越出版社刊)を刊行、運命的な
デビューとなり、新田次郎文学賞を受賞。
代表作に『重耳』がある。
本作品は、1993年3月から「東
京新聞」等に連載された。

本書の無断複写(コピー)は著作権法上での例外を除き、禁じ
られています。

落丁本・乱丁本は小社書籍製作部あてにお送りください。送料
小社負担にてお取り替えいたします。

なお、この本についてのお問い合わせは、文芸図書第一出版部
あてに願います。

©Masamitsu Miyagi 1995, Printed in Japan

孟嘗君 1・目次

消えた赤子

7

流れ雲

47

大望の道

97

西方の風

153

決断

204

天下往来

262

孟嘗君もうしようくん

消えた赤子

夏の落日である。

夕陽が邸内に射した。

ななめの光は、はげしくもするどくもなく、なぜかしずかに降るようであり、その光にふくまれてゐる赤の色が、槐えんじゆの葉や幹をやわらかく染めた。

この槐は大木といってよいであろう。

木の翳かげが、二階建ての家の一部を黒く沈め、そこだけがすでに夜の色であつた。

大きな家である。階上にも階下にも欄干らんかんがみえる。その欄干は部屋によつてぬりわけられていて、槐の木にもっとも近い部屋の欄干の色は青であつた。

木の翳から女の手がでた。その手はかさなつたまま欄干におかれた。天わかく美しい女の手である。夕陽がその手をほんのりと赤く光らせた。まもなくその手の甲のうえに女のひたいがすり

つけられた。女のすすり泣きが欄干からもれ落ちた。

槐えんじゅの木の下を通った中年の男がいる。

この男は僕延ぼくえんとよばれ、庭内の清掃をおもな仕事としている。

かれは足をとめ、目をあげた。槐の木にささやかれたような気がして、ふしぎそうに頭上をながめていたが、ようやく気づいて、二、三步足をうごかすと、二階をみあげ、

「青欄せいらんさま、どうなさいました」

と、呼びかけた。

この建物はいわば後宮である。この邸のあるじを、

田嬰でんえい

と、いい、齊せいの君主の子である。田嬰は太子ではないが、若くしてその賢能は世評に高く、

その盛名によつてひとつの威勢を齊の朝廷において形成していた。

青欄は田嬰の妾しやうのひとりである。

かの女は下働きとしてこの邸にはいつてきたのであるが、美貌が田嬰の目にとまり、浴室において田嬰に抱かれた。田嬰は三十まえの若さである。そのからだは精力にみち、その性格も激情にひたされることがなくなないので、はげしい愛撫であつた。かの女は柳腰といつてよく、田嬰のはげしさをまともにうけて、その腰はくだけそうであり、すらりとした四肢はちぎれそうであつた。

その後、かの女はうちすてられていたが、

「子を宿しました」

と、田嬰に訴えた。田嬰はいきなりかの女の裳をまくりあげるように手をいれ、女の腹のうえに掌をのせて胎孕^{たいよう}をたしかめると、

「よい子を産んでくれ。部屋をさすけよう」

と、いつにないやさしさでいった。

かの女には侍女がつけられた。かの女が青欄とよばれるのは、青い欄干で部屋の三方がかこまれているからである。南のすみにあたる部屋である。

槐の葉が西日をさえぎってくれる。冬には、葉があざやかに色づいて落ちてゆくので、部屋に陽射しがとどく。

青欄はその槐が好きで、よく欄干にもたれてながめていたので、庭で働く者の顔もおぼえ、そのなかで僕延という親切そうな男と、上と下とでかんたんなことばをかわすようになった。「どうなさった」

僕延の声が階上にとどいていないはずはないのに、青欄は顔をふせて泣きつづけている。

僕延は迷ったようなそぶりをした。立ち去ろうとしたが、すぐに槐の木の下にもどった。背をかがめ、すばやくあたりをうかがった。このとき、かれの柔和な顔がとぎすまされたようになり、目にけわしい光があらわれた。人影のないことをたしかめると、するすると木をのぼった。その身のこなしはただ者ではないようであつたが、青欄は気づいていない。

僕延は木の枝に足をかけ、槐の花をゆらして、欄干に近づくと、低い声で呼びかけた。
青欄の顔があがった。

「あ……」

わずかに唇がひらいた。目にたまった涙に夕陽の赤がうつっている。

僕延はこれだけまぢかに青欄をみたのははじめてであつたが、遠くからみていた顔より、はるかにととのつた美しさがあつた。

小さな息を吐いた僕延は、自分でもわけのわからぬやるせなさを感じた。

——木をのぼってくるのではなかつた。

と、後悔した。

そんな気持ちとはまったくことなり、かれはいたわるような目つきで、

「ずいぶんお嘆きになつておられたので、気になりましてね。わけをきいても、どうしようもないかもしれません……」

と、いい、青欄の表情の変化を待った。自分のことばがこの美妾に染みたかどうか。

「ああ、僕延」

虚空をさまよつていたような青欄のまなざしが、ようやくさだまつた。青欄はいちどうつむいた。涙が光つて落ちた。その涙にうつつていた槐の花も落ちたのか、と僕延はおもいつつ、だまつてみている。顔をあげた青欄は、さきほどにくらべて表情に締まりがみえた。

「子を産んだのです」

「知っていますよ。今日は、赤子のなき声がきこえませんか」

と、いった僕延は、急に眉をひそめ、

「まさか、赤子が亡くなられたのでは——」

と、せわしくいった。

「いえ、いまはねむっています。でも、今夜、わたしは、自分の子を殺さなければならないのです」

青欄は、また、泣いた。

化粧が涙でくずれてゆく。それがつづくと、なにか新鮮な肌が剥き出してくるような妖しきをおぼえた僕延は、いつそうのおどろきをこめて、

「ご自分の子を殺すなんて……。そりゃ、どうしたわけですか」と、きいた。

このとき、青欄の顔から夕陽の赤が消えた。庭から青い夜の気が立ちのぼってくる。僕延の手もとで咲いている槐の花が青くなった。

青欄はうつむきがちに、

「そうですね……。お話しすれば、あの子が生きていたことを、わたしのほかに、僕延が知ってくれることになりますのね」

と、細い声でいい、心をきめたように僕延をみつめた。

僕延はなまつばをのみこんだ。

奇妙な話である。

青欄はこの月のはじめに男子を産んだ。そのとき田嬰は不在であり、十日ほどして帰つてくると、わが子の誕生を大いに喜び、青欄をねぎらい、この男子に、

文

という名をあたえた。ところが数日後に、荒々しい足どりで青欄の部屋をおとずれた田嬰は、恐ろしい形相で、

「何日に生まれた」

と、念をおすように問うた。青欄はおびえがちに、

「五日でございます」

と、こたえた。

「五月五日の子か。やはりな」

田嬰は吐きすてるようにいうと、自分の子をひとにらみして、青欄のほうへ目をもどし、

「殺せ」

と、低い声でいった。

青欄はさっと青ざめた。田嬰は立とうとした。田嬰にすがりつくように裳をつかんだ青欄は、

「なにゆえ、この子を殺さねばならぬのでしょうか」

と、あえぎながらいった。

「不吉だ」

「五月五日生まれが、なにゆえ不吉なのでございますか」

青欄の声に必死のするどさがある。

「不吉だから、不吉だ」

「わかりませぬ」

そういった青欄の襟をしぼりあげた田嬰は、

「よいか、明日、いや一日延ばしてやろう。明後日までに殺せ。そなたが殺せないというのなら、わしがこうして締め殺してやろう」

と、はげしくいつてから、手をはなした。

直接に田嬰の命令をうける立場にいない下人かじんというべき僕延でも、この邸の主人の気性がどういうものであるかは、上役のゆるみのない勤務のありかたから、ひしひしと感ずることができる。すなわち田嬰という主人はかなり厳烈であるということである。その田嬰が、

「殺せ」

と、いったかぎりは、青欄はどうしても自分の産んだ子を殺さなければならぬまい。そうしなければ、田嬰は烈火のごとく怒り、みずから赤子の首を締めて殺したあと、青欄をこの邸からたたきだすかもしれない。正妻であろうと愛妾であろうと、自分の命令にさからう者にたいして、田嬰は容赦しそうにない。

そうおもった僕延の胸はさわぎ、そのさわがしさの底から湧きあがってきたものがあつた。憐憫の情というものかもしれない。

——わらしくない。

と、かすかに苦笑した。が、その苦笑は胸のなかでおさまり、かれの浅黒い面貌にいささかもあらわれなかった。

「五月五日生まれの子のどこが不吉なのでしょう」

青欄は僕延をみつめながらそういった。それは僕延に訊いたというより、生まれてひと月も生きられず、消えてゆかねばならぬ悲運の子にたいする悼辞のようなひびきをもっていた。もはやどこをさがしてもあきらめしかない、むなしい口ぶりであつた。

「へえ、むごいことですねえ……」

と、こたえた僕延は、木の下をみた。だれも通らない。僕延はかわいてきた唇をなめて、
「青欄さま。その子を、わたしがおかくまいしましょうか」
と、低いが強い声でいった。

「え——」

青欄は別人のようにはつきりした顔つきをした。僕延はことばを継いだ。

「たしかに五月五日には、お祓いのようなことをいたしますが、五月五日の子を殺さなければならぬ、なんて話は、きいたことがない」

青欄はうなずいた。